

研究論文

学生から見た演習科目の意義

—「経営学部教育についてのアンケート」集計結果より—

鈴木 そよ子

はじめに

1990年代中盤から続いた、大学設置基準の「大綱化」を前提とするカリキュラム改革の時期を経て、改めて大学の魅力づくりを目指したカリキュラムが模索されようとしている今、カリキュラムを考える上での議論の焦点のひとつが、演習科目の位置づけと運営のあり方に置かれている。演習科目は、先のカリキュラム改革において、少人数教育の実質を担う科目として拡充された科目群であった。受験生へのアピールポイントとしての意味ももっていた¹⁾。

演習科目の「重視、拡充」の実質は大学によって多様である。'99年度の『大学案内』を見る限り、東京都・神奈川県下における32の経営学関係学部・学科のうち、1年次から4年次まで演習科目を配置し、すべての演習科目を必修にしているのは、神奈川大学経営学部のみである。他大学の場合、一般的には、すべて選択科目か、あるいは一部の年次のみ、演習科目を必修科目として配置し、少人数でゼミ（演習）を実施するというポイントと、教員の授業負担とのバランスをとっている²⁾。

神奈川大学経営学部は、特に、演習科目を拡充してきた学部だといえる。'93年の新カリキュラム実施の際、「基礎演習」「演習Ⅰ」が必修科目として加わり、1年次から4年次まで演習科目を必修とする体制は、2000年度現在も継続されている。配当年次と科目名は、1年次前期「基礎演習」（2単位）、2年次後期「演習Ⅰ」（2単位）、3年次通年「演習Ⅱ」（4単位）、4年次通年「演習Ⅲ」（4単位）である。

本論文では、演習科目実施形態のケーススタディーとして本経営学部における演習科目を採り上げる。今後のカリキュラム構想における演習科目の位置と運営方法のあり方を確定していく上で、このような各年次演習科目必修体制をどうすべきかについて考察する。今後、さらに拡充すべきか、継続すべきか、あるいは、選択科目としておくべきか、さらに、演習科目の変更が望ましいのか。

本論文の研究方法として、これらの問いを考える際に、実際に学んでいる学生たちが演習科目をどのように見ているのかという視点から考察する方法をとる。その資料として、'99年5月に経営学部の1年次から4年次生を対象として実施した「経営学部教育についてのアンケート」の質問項目への回答を用いる。

本論文で検討する演習科目に関わる基本的事項について述べておくと、演習科目の概要に関する内容は『履修要覧』の各科目ごとのシラバスにあたる「講義計画」に基づいて紹介する。経営学部の演習科目は、基本的に専任教員が担当することになっている。経営学部には、学部科目の基本科目、専攻科目の専任教員が所属しており、幅広い演習科目設定ができる条件下にある。

本論文の構成は、まず、「経営学部教育についてのアンケート」の実施経緯と概要を述べ、アンケートとしての有効性を確認した後、演習科目別に、カリキュラム上の位置づけと内容を整理した上で、アンケートの回答を検討する。これらを踏まえて、今後の演習科目のあり方について考察する。

本論文の考察は、「アンケート」を資料とするという限定性を前提としながらも、授業を受けている学生の声をまとめる窓口のない現状においては、今後のカリキュラムを構想するために、基底的な方向性を見出すという意義があると考えられる。まず、現在の形態で演習科目を継続すべきかどうかという問題について、方向性を提示する。必修科目という位置づけを変更することと並行して、演習科目の可能性をひろげる方法について述べる。

I 「経営学部教育についてのアンケート」の実施概要

本アンケートは、当時経営学部内に設けられていた学部将来構想委員会で、今後10年を見通した学部教育改革を構想するに当たって、学生たちが学部教育の現状をどのように捉えているか、また、経営学部は何を期待しているのかを把握した上で、基本的な構想づくりをしようという委員の意向で企画された³⁾。

'99年4月28日の会議で、委員の1名に企画・実施方法・集計が託され、5月12日の教授会で実施についての承認を受けた後、13～26日の2週間で1年次から4年次生を対象としたアンケートを実施した。実施日から1ヶ月間で、集計・記述回答のすべてを、学部内で、ワープロ打ち227ページに及ぶ『経営学部教育についてのアンケート集計結果』1冊にまとめた。これは、現在、経営学部専任教員、非常勤講師等に配付され、学生も平塚キャンパス図書室で自由に閲覧できるようになっている。

アンケート全体の質問項目は本論文末の資料「経営学部教育についてのアンケート」を参照されたい。質問項目の確定過程は、アンケートを実施する趣旨に則りながら、大学教育をテーマとして扱える授業で学生100名余りに「経営学部の問題

点・改善すべき点はなにか」と問い、その回答をアンケートの設問や回答の選択肢構成に活用し、23名の学生モニターから意見を聞き、関係教員からのアドバイスを参考にしながら決定していった。

アンケートは、各年次の前期に配当されている必修科目の授業中に実施した。1年次「基礎演習」、2年次「会計学原理Ⅰ」、3年次「演習Ⅱ」、4年次「演習Ⅲ」で、年次により15～30分の授業時間を割り、学生から回答を得た。アンケート実施当日に回収し、集計を開始した。

回答者の人数およびパーセントは、表1「年次ごとの回答者数と回答率」にあるが、1年次「基礎演習」と3年次「演習Ⅱ」では、すべてのゼミからの回答を得られた。4年次は就職活動と重なったため、開かれていないゼミもあり、開かれている場合も出席者が少ないため回答率は低くなった。平均して62%の回答率であり、アンケートとして有効な回答率を得ることができた。

表1 年次ごとの回答者数と回答率

	1年	2年	3年	4年	合計
各学年の人数	491	600	468	457	2016
回答者数	405 (82%)	318 (53%)	396 (85%)	135 (30%)	1254 (62%)

Ⅱ 「基礎演習」(1年次前期・2単位)

1 カリキュラム上の位置づけと内容

「基礎演習」は、他の授業と同様に、週に一度の授業である。「講義計画」によると、大学生活のオリエンテーション機能を担う科目として性格付けられており、幅広い目的設定がなされている。その目的は2つに区分されている。第一は、「勉学の基本姿勢の確立や科学的なものの考え方、さらには学修上の基本的な方法と技術などについて学ぶ」⁴⁾ ことにあり、第二は、「学生が刺激し合い、担当教員の指導と人間的交渉を通じて、責任ある社会的存在としての自覚を形成すること」⁵⁾ にある。

内容は、同じく「講義計画」によると4点から構成されており、①大学における「学修設計」を行うこと、②図書・資料の収集、検索、整理、活用の方法を学ぶ「資料発見」、③レポート・論文の書き方、報告と討議の方法を学ぶ「自己表現」、④大学生活における諸問題を通して、社会的存在としての自覚を高め、自己管理・自己啓発の能力を高める「自己管理」からなる。

具体的な指導内容及び方法について、特に全体的な打ち合わせは行わず、各教員の判断に任せられているので、一クラスごとの教材、運営方法、評価の基準も異なる。

る⁶⁾。一クラスの人数は、入学者数を担当教員数で割った人数となる。入学者を学籍番号順にクラス分けし、担当教員が割り当てられる。'98年度は30クラスあり、平均18名、'99年度は31クラスあり、平均16名である。

2 学生から見た「基礎演習」の重要度とその理由

「基礎演習」に関して、アンケートではすでに「基礎演習」の履修を終えている2年次から4年次生が回答する設問として、「あなたにとっての重要度とその理由を記入して下さい。」と尋ねた。(資料・設問I-1参照)重要度を5段階に分けている。回答者は5段階のどれかの数字を選び、理由を書き添える。理由は5段階の数字の横に設けられた5～10字くらいのスペースに書かれたもので、一文節程度の長さであり、記述のない場合もある。この設問は、1・2年次の他の必修科目(「文章表現法」「ネットワーク概論」「健康科学I・II」「簿記原理I・II」「経営学総論I・II」「異文化間コミュニケーション論I・II」「国際経営論I・II」「会計学原理I・II」)についても同様に尋ねたものである。相互に比較することによって、学生から見た重要度の違いを知ることができる。

表2「基礎演習の重要度」にあるように、1年次から4年次までを平均してみると、5段階の5は32%、4は28%、3は24%、2は8%、1は6%となる。「基礎演習」の重要度を5と回答した者・32%は、「ネットワーク概論」の63%に次ぐものであり、他の科目がすべて20%台であることを考えると、科目の重要度が他の必修科目に比べて、認められているとみることできる。

これを判断するために、5から1までの各段階の理由として、記述した内容を分類したものが、表3「基礎演習の重要度ごとの理由・記述内容の分類」である。

表2 「基礎演習」の重要度

	2年	3年	4年	合計
5	95 (30%)	122 (31%)	55 (41%)	272 (32%)
4	79 (25%)	125 (32%)	33 (24%)	237 (28%)
3	85 (27%)	89 (22%)	32 (24%)	206 (24%)
2	32 (10%)	30 (8%)	9 (7%)	71 (8%)
1	27 (8%)	17 (4%)	4 (3%)	48 (6%)

注・「I 必修科目・選択必修科目について1. 2～4年次回答：あなたにとっての重要度とその理由を記入してください」の回答
%は該当者数 回答者数を示す。%の小数点以下は四捨五入とする。

表3 「基礎演習」の重要度ごとの理由・記述内容の分類

理由 重要度	友達づく り	コミュニ ケーション	学生生活 の導入	ゼミの 準備	レポート 論文など	わからない 無意味	教員によ る違い	その他	計
5	94	30	37	11	7	0	0	28	207
4	63	33	14	12	13	0	1	13	136
3	29	5	6	7	4	27	8	23	109
2	6	0	1	0	1	28	2	6	44
1	0	0	0	0	0	32	2	2	36

5と回答した272名うち、理由を記入したのは207名（76%）。記述内容を分類すると、「友達ができ」「仲間が増える」「多くの友をえた」など、誰も知人のいない新しい環境の中で、交友関係の第一歩を築くことに役立ったと答えているものが、94（45%）。少人数の演習授業で「学生間のコミュニケーションの（授業に関して）唯一の方法」「ディスカッションの練習になった」という、少人数での授業の特徴を反映した指摘が、30（14%）。あわせて5と回答した者の記述のうち、59%が少人数クラスでの人と人とのつながりを「基礎演習」の評価できる点と捉えている。また、4と回答した者のうち、「友達づくり」「コミュニケーション」に関わる回答の割合は、96（70%）に及ぶ。

重要度5や4の回答で肯定的に述べられている交友関係の第一歩としての「基礎演習」の意味は、重要度3以下では、否定的なニュアンスで述べられている。「仲間をつくれるだけである」「利点は友だちができるくらい」「教員によるのかもしれないが、友人作りのため程度にしか感じなかった」「知り合いづくり程度にしかならなかった」。重要度5の記述回答と3以下のそれぞれの回答を、「基礎演習」の目的と照らし合わせてみて、どのような満足感が得られることが「基礎演習」に相応しいのかを読み取らねばならない。

また、「講義計画」の「基礎演習」の目的及び内容をみると、記述回答の「学生生活の導入」「ゼミの準備」「レポート・論文など」が重要になってくるのだろうが、この三者をあわせて、5の記述では26%、4の記述では21%に過ぎない。

重要度3以下では、「基礎演習」がわからない、無意味だという現状に対する否定的、批判的な見方が明確になっている。「何が目的かよくわからない」「必修になっている意味がよくわからない」「内容に意味がない」「あまり必要に感じない」これらは、3の記述回答の24%、2の63%、1の88%に及ぶ。

Ⅲ 「演習Ⅰ」(2年次後期・2単位)

1 カリキュラム上の位置づけと内容

「演習Ⅰ」の位置づけは、1年次の「基礎演習」や3年次以降の卒業論文につながる研究ゼミとは独立したものとなっている。「3年次、4年次へと進級して、大学における各人のテーマに沿った勉学を演習Ⅱ・Ⅲとして継続的にかつ本格的に追求する際の、準備期間ないし助走段階」⁷⁾にある。

この半年間の演習を通じて「自分に合ったテーマや自分の問題関心・興味を引きだしてくれる問題領域がなにであるか、半年かけて見極めてほしい」⁸⁾という意図のもとに開かれているゼミである。

この意図は、他大学で開かれている2年次の演習科目とは基本的な性格が異なる。他大学において、2年次にゼミ(演習)を配当している経営学関係学部・学科は多いが、一般的には、3年次に履修するゼミナールでの研究に半年早く着手するものとして、選択科目に位置づけている⁹⁾。

本学部において、教員は、原則として2年次後期のみの担任者となる。経営学専門の教員に限らず、多分野の専任教員が加わっている。直接自分の専門領域について演習を展開するのではなく、3・4年次にどのゼミを選んでもいいように、社会科学の基礎力をつけることが各教員に課された共通の課題となっている。ただ、指導内容及び運営方法、使用教材は担任教員の判断に委ねられている。

「演習Ⅰ」の「講義計画」を'99年度版の『履修要覧』にみると、科目として統括された〈講義内容〉〈講義計画〉〈講義運営及び評価方法〉のあとに、担任者ごとの〈指導目標〉〈指導内容〉〈運営方針〉〈使用教材〉が続く。

その内容は多岐にわたる。ゼミ参加者が決まってから、内容を定めるゼミ。自己表現・他者理解に重点を置くゼミ。使用テキスト、テーマを明確に提示して、3年次以降の専門的なゼミにつながる位置づけで内容を構成しているゼミ。問題発見・問題解決能力をつけることを前面に押し出しているゼミ。そして、研究論文を作成するゼミ¹⁰⁾。

ゼミの選択方法については、1年次の「基礎演習」とは関係なく、各学生が講義計画の内容と自分の履修可能な曜日・時間帯の両方を考えて希望するゼミを選ぶことになる。2年次の4月の時点で「マネジメントコース」「コミュニケーションコース」「環境コース」のうちのいずれかを選択しており、これらの必修科目のない時間帯に置かれているゼミのなかから選択することになる。演習とコースの関係性は設定されていないため、時間割上、厳密な意味での演習内容とコースの組み合わせはない。ゼミ決定は、4月に申し込みをして、定員まで受け入れられ、それを越え

る応募者がある場合は、選考が行われる。'99年度に開かれたゼミの数は27、1ゼミ平均人数は22名。ゼミごとの人数をみると多少の違いはあるが、平均すると20名程度の人数で推移している。

2 「演習 I」の位置づけに対する学生の希望

アンケートでは、「演習 I（2年次後期）の位置づけが変わるとすれば、どれを希望しますか。」（資料・設問 V-3 参照）と尋ねた。表4「演習 I の位置づけに対する希望」がその結果である。

表4 「演習 I」の位置づけに対する希望

	1年	2年	3年	4年	合計
必修(現行のまま)	115 (28%)	124 (39%)	196 (49%)	65 (48%)	500 (40%)
選択必修	74 (18%)	89 (28%)	119 (30%)	48 (36%)	330 (26%)
選択	129 (32%)	94 (30%)	75 (19%)	20 (15%)	318 (25%)

注・「V-3. 演習 I（2年次後期）の位置づけが変わるとすれば、どれを希望しますか」の回答

1・2年次生は、アンケートの時点でまだ授業を受けていないから、必修であること自体について回答している、あるいは、先輩等から聞いたイメージをもとに回答していることになる。いわば、期待度の数字と解釈できる。このまま必修を望む1年次生は回答者の28%、2年次生は39%。

すでに「演習 I」を履修しており、アンケートの回答率85%の3年次生についてみると、このまま必修を望むのは49%。選択必修になることを希望するのが30%、選択科目でいいと考えるのが19%である。この設問では、選択肢を選んだ理由は尋ねていない。メモ書きをしている回答者は「やる気のない人がいると、つまらない。」¹¹⁾と記している。

3 学生が「受けてよかった」「ためになった」とみる「演習 I」

この問題と関わるアンケートの問いとして「今までの授業の中で、『うけてよかった』『ためになった』授業の科目名・教員名・理由をあげてください。（複数回答可・別紙の教育課程表を参照）」（資料・設問IV-5参照）がある。ここでは、3・4年次の回答者531名のうち、33名（6%）の学生が「演習 I」の14ゼミをあげている。よかった点は次の5点に分類できる。

- ① 論文の書き方、レポートの書き方に関わる指導
- ② ディスカッション・ディベートに関わる指導
- ③ 教員とのコミュニケーションのなかでのアドバイス、自分の考え方の変化

- ④ テーマを選べるグループ調査と発表
- ⑤ テーマの興味深さ

Ⅳ 「演習Ⅱ」(3年次通年・4単位)、「演習Ⅲ」(4年次通年・4単位)

1 カリキュラム上の位置づけと内容

「演習Ⅱ・Ⅲ」の目的について、「講義計画」では「『演習Ⅱ・Ⅲ』は原則として少人数で行われるため、担当教員と学生、学生相互間で極めて親密な関係が生まれ」、「諸君が在学中、あるいは、社会に出てから、『大学において、私は特にこの問題について専門的に研究した』といえるものを身につけるために設けられた」¹²⁾と特徴づけている。

履修方法についても、「基礎演習」「演習Ⅰ」とは異なる形で行われる。学生は、2年次の10月に配付される「演習要項Ⅱ・Ⅲ」を読み、ゼミごとに開かれる説明会に参加した上で、事務局で〈1次募集〉の申し込みをする。定員を越える申し込みがあった場合、選考のための面接を行う。定員を超えない場合も面接をすることができるが、これは「顔合わせ、ゼミの理解を深めるために行われるもの」¹³⁾という性格のものとなる。〈2次募集〉では、定員に満たないゼミ、一次募集でゼミが確定しなかった学生が対象となる。教員が面接日を設定し、面接をしたうえで定員まで受け付ける。申し込みをしながら、連絡なく、面接に来ない学生は二次選考の対象とならない。

ゼミの内容や運営方法は、専門の演習として当然のことではあるが、担当教員に任されている。全体に共通する課題は、4年次の1月に卒業論文を提出することである。論文の条件は、ゼミごとに設定されている。

ゼミは、次の4つの領域に区分されており、'99年度、2000年度の要項では、次の数のゼミが開講されている。

	'99年度	2000年度
① 経営・マーケティング関連	9	9
② 会計・情報関連	5	5
③ 経済・法律関連	6	5
④ 社会・文化関連	12	11
計	32	30

「演習Ⅱ・Ⅲ」は、原則として同一教員のゼミに所属することになっているので、このゼミ数は、その年度の3年次生に向けて開かれているゼミの数である。他の演

習科目と同様に、専任教員の担当する科目となっており、経営学専門の教員に限らず、多分野の教員が加わっている。

ゼミナールごとの定員は、これも3年次の学生数を演習担当教員数で割った人数になる。'98年度は、平均25名、'99年度は平均22名、2000年度は平均20名である。3年次生、4年次生ともに20人を超えるため、年次ごとにゼミが行われることになる。たとえば、月曜の3限は「演習Ⅱ」、4限が「演習Ⅲ」といった具合である。

2 「演習Ⅱ・Ⅲ」の位置づけに対する学生の希望

アンケートでは、「演習Ⅱ（3年次）・演習Ⅲ（4年次）の位置づけが変わるとすれば、どれを希望しますか。」と尋ねた。（資料・設問Ⅴ-4参照）回答は、表5「演習Ⅱ・Ⅲの位置づけに対する希望」の通りである。

表5 「演習Ⅱ・Ⅲ」の位置づけに対する希望

	1年	2年	3年	4年	合計
必修（現行のまま）	93 (23%)	132 (42%)	249 (63%)	82 (61%)	556 (44%)
選択必修	70 (17%)	55 (17%)	94 (24%)	33 (24%)	252 (20%)
選択	143 (35%)	74 (23%)	48 (12%)	17 (13%)	282 (22%)

注・「Ⅴ-4. 演習Ⅱ（3年次）・演習Ⅲ（4年次）の位置づけが変わるとすれば、どれを希望しますか」の回答

年次ごとに回答の内訳比率の意味が異なっている。1・2年次生の場合、まだ授業を受けていない。やはり、期待度として見ることができる。1年次生は全体として回答者の75%が記入しており、そのうち、①「選択」（35%）、②「必修（現行のまま）」（23%）、③「選択必修」（17%）である。2年次生は全体として回答者の82%が記入しており、①「必修（現行のまま）」（42%）、②「選択」（23%）、③「選択必修」（17%）である。

それに対して、3年次生の場合、アンケートの回答をしているのが「演習Ⅱ」の時間帯であることは、多少のバイアスになるとしても、始まって1ヶ月ほどの体験を踏まえながら答えていることになる。3年次全体の回答率は85%であり、アンケートとしては3年次生総体の意向をここから判断することができる。回答者全員がこの問いに回答しており、①「必修（現行のまま）」（63%）、②「選択必修」（24%）、③「選択」（12%）の回答となっている。

4年次生の場合、全体の回答率30%のなかで得た回答であることを考慮しなければならないが、この結果は、3年次生の回答者の割合とまったく一致する。

学生が「演習Ⅱ」の履修に際してゼミを選択する理由についてアンケートで尋ね

ている。「演習Ⅱのゼミを選んだ、一番の理由は何ですか。」（資料・設問Ⅱ-2参照）この設問に対する回答が、表6「『演習Ⅱ』のゼミを選んだ一番の理由」である。

表6 「演習Ⅱ」のゼミを選んだ一番の理由

	3年	4年	合計
ゼミのテーマ	228 (58%)	66 (49%)	294 (55%)
先生の人柄	147 (37%)	50 (37%)	197 (37%)
友達といっしょ	60 (15%)	8 (6%)	68 (13%)
ゼミの厳しさ	25 (6%)	9 (7%)	34 (6%)
就職が有利	25 (6%)		25 (5%)
しかたなく	15 (4%)	5 (4%)	20 (4%)
ゼミのラクさ	18 (5%)	6 (4%)	24 (5%)
研究テーマ設定の自由さ	36 (9%)	22 (16%)	58 (11%)
その他	23 (6%)	11 (8%)	34 (6%)

注・「Ⅱ-2. 3・4年次生回答：演習Ⅱのゼミを選んだ、一番の理由は何ですか」の回答

複数回答もすべて計上

この問いの回答対象は3・4年次生だが、両者の回答率の違いに関わらず、一番多い理由が「ゼミのテーマ」であり、二番目が「先生の人柄」という点は共通している。

V 経営学部における演習科目のあり方

1 演習科目に対する学生の見方

演習科目のうち、「基礎演習」と「演習Ⅰ」に対する学生の見方と、「演習Ⅱ・Ⅲ」に対する学生の見方は異なっている。前者の「基礎演習」については、人間関係づくりに関しての評価が大きく、「演習Ⅰ」の選択科目化を希望する傾向がある。それに対して、後者の「演習Ⅱ・Ⅲ」については、ゼミでの演習経験をもつことによって、必修あるいは選択必修を希望する学生の割合が増えている。

教員から見ても、「基礎演習」「演習Ⅰ」と、「演習Ⅱ・Ⅲ」の意味は異なる。「基礎演習」では、大学の案内者としての役割を担うことになる。「演習Ⅰ」では、社会科学への案内者としての役目を果たすことになる。つまり、個々の教員の専門領域や研究の蓄積を背後に置くことによって、授業運営が成り立つような構成になっている。それに対して、「演習Ⅱ・Ⅲ」では、経営学部という限定はあるが、多様な研究領域の教員が自分の研究との関わりでゼミ運営をすることができる。

演習科目として同列に並べられてはいるが、各教員の授業運営に任されている以上、教員にとっての意味の違いが、授業の進め方や指導のポイント、評価方法に反映されることになる。その違いを学生は肌で感じ取っているのではないか。

2 少人数教育としての演習科目

演習科目は、従来、学部教育の仕上げと同時に、研究の第一歩として3・4年次に置かれてきた科目であった。これが、この間のカリキュラム改革で、少人数教育の実質を担う科目として、1・2年次へと広げられた。新たに設けられた1・2年次の演習科目の性格は、二つに分けることができる。大学生活への導入としての演習、そして、教員が各自のテーマを掲げて研究の導入へと誘う演習。前者の場合は、同一科目担任者の運営方法、授業方法、評価方法を統一しておく必要があり、後者の場合は、各学生がレベルに応じて研究の面白さを実感できるような工夫が必要である。それぞれに必修科目の場合と選択科目の場合がある。年次も指定されている場合と、自分の必要に応じて履修できる場合がある。さらに、演習科目として一度のみ単位の認定をする場合と、数種類の演習を1年次から4年次までの問題関心の変化に応じて履修し、それぞれを単位認定する場合もある。これらの組み合わせは、学部の教育目標とあわせて、カリキュラム作りの段階で、少人数教育としての演習科目の意義をどのように理解しているかに左右される。

本経営学部についていえば、1・2年次の演習科目のために、半期1コマとみると、約60コマが費やされている。「基礎演習」「演習Ⅰ」に当てているコマ数を、このような名称で一括するのではなく、演習形態で行う一般授業として配置し、教員がレベルに応じたテーマ設定をし、選択科目として位置づけられたら、学生も1年次から4年次までの自分自身の問題関心や問題意識に即して、演習形態の授業を複数受講できるのではないだろうか。

3 学生層の広がりに対応する演習科目の選択化

「基礎演習」の重要度ごとの理由のなかに「友達ができた」(重要度5)、「利点は友達ができるくらい」(重要度3)とあった。ここに典型的にあらわれているのが、学生層の広がりではないだろうか。大学に対する意識、学ぶということの意味の捉え方、身につけてきた基礎的学力、在学している目的などにおいて、多様化している。

演習科目においても、人間関係づくりを重要視するのか、あるいは、これが授業の意義になっていいのかという問いを投げかけられている。ここで改めて、同一の必修科目を課し続けることが、実質的な力を養うことになっているのかどうかを検討しなければならない。

本学部にも多くの必修科目があるが、多様な多人数を対象とした講義科目の必修は、いきおいマスで学生を扱うため、形式だけの評価に陥る危険性をはらんでいる。だが、演習科目においても、少人数だからこそ、一人の学生の意識や態度がゼミに与える影響は大きい。その科目の必要性を学生自身が判断し、その科目を必要とする学生を対象として演習形態の授業ができると、演習科目の本来の目的が達成されるのではないか。

4 「演習Ⅱ・Ⅲ」と専攻科目の関係

演習科目の特質を生かすために、カリキュラム全体の中での演習科目の位置づけを明確にする必要があり、一番効果的だと考えられる位置づけを選択する必要がある。「演習Ⅱ・Ⅲ」も、経営学を専門とする教員に限らず、広い専門領域の専任教員が担当している。この利点は、幅広い選択肢が用意されているということであるが、逆に、2年次までに関係科目を履修していない場合、ほとんど予備知識をもたない学生がゼミ生になることが多々あるということである。募集要項は、2年次後期に配付されており、この時点では、すでに受講していることが望ましい科目名をあげることもできない。その分野に関連した授業を全く履修していない20名前後の学生を対象として演習授業を行い、卒業論文指導を行わなければならないという実情がある。これは、演習の質を大きく左右する問題であり、カリキュラム構成の基本的な問題である。

経営学部を専門を深める研究の機会として演習科目を位置づけるのか、あるいは、経営学という雰囲気は共有しながら個々の学生の自由な問題意識をもとに研究の第一歩を体験させるのかということを確認し、他の科目との連動性をつくりあげることが、演習科目を有効に生かすことになると思う。

まとめ

本論文では、「経営学部教育についてのアンケート集計結果」を読み取りながら、演習科目のあり方について考察した。現在進められようとしているカリキュラム改革は「大学の生き残りを賭けたもの」といわれている。その観点として欠くことができないのは、学生が大学教育において自分を高められる実感を得られることであり、教員が教員として、研究者としての充実感を得られることである。これは、キャンパスの活気の根幹を司る。そのために、演習科目は有効に生かすことができる。少なくとも「基礎演習」「演習Ⅰ」を統一科目とせず、カリキュラム全体を考えながら、一般科目に位置づけて演習形態で実施する科目とする。その内容は、担当教員の専門性を活かし、レベル分けしたものを用意する。これによって、年次を限らず、学

生の選択によって、複数の演習科目を履修することができる。

さらに、3・4年次の演習も変更が可能ならば選択科目とし、卒業論文は演習科目から切り離して別単位とすることによって、その意味を明確にできる。

このような変更は、選択科目であっても、学生が魅力を感じて積極的に履修する「演習」のあり方を、教員に求めることを意味している。と同時に、この変更がさらに大学教育の質を高めるようなしくみを、カリキュラムづくりの段階で構成するという課題をも意味している。

注

- 1) '99年度の「大学案内」によると、東京都・神奈川県下の経営学関係学部・学科の受験生に対するアピールポイントとしての「教育活動の特色」は、次の7点にまとめることができる。
 1. カリキュラムの自由性
 2. 少人数教育
 3. セメスター制の導入
 4. コンピュータ教育と施設の充実
 5. 特徴的な授業や教育実践（現役の企業人による特別講義、インターンシップ、企業シミュレーションなど）
 6. 国際交流センター等が中心になって進める全学規模での国際交流の活性化（特に海外留学と4年卒業の両立）
 7. 学部教育に関わる資格取得のためのサポート体制
- 2) 鈴木そよ子「経営学関係学部・学科における教育活動の『特色』とその傾向」、神奈川大学経営学部『国際経営論集』第16・17合併号、1999年、pp.283～307
- 3) この作業は、'99年12月からカリキュラム改革委員会が引き継いでいる。アンケート集計結果の概要については、'99年6月19日の学部将来構想委員会、'99年7月14日の経営学部教授会で報告された。
- 4) 神奈川大学経営学部『履修要覧』1999年度、p.115
- 5) 同上。
- 6) 新カリキュラム実施後、3年間は当時必修科目であった「文章表現法」と連動する内容が組み込まれていた。
- 7) 神奈川大学経営学部『履修要覧』1999年度、p.97
- 8) 同上。
- 9) 注2参照。

国際経営フォーラム No.11

- 10) 神奈川大学経営学部『履修要覧』1999年度、pp.97～107
- 11) 神奈川大学経営学部『経営学部教育についてのアンケート 集計結果』 p.190
- 12) 神奈川大学経営学部『履修要覧』1999年度、p.106
- 13) 神奈川大学経営学部『2000（平成12）年度「演習要項Ⅱ・Ⅲ」』

経営学部教育についてのアンケート

経営学部では、学部将来構想委員会が中心となって、今後10年間を見通した学部教育改革の準備を進めています。そして、現在、経営学部に学ぶみなさんの声に基づきながら、改革方針を見いだしていきたいと考えています。どうぞ、率直な回答をお願いします。

経営学部長 石積 勝

□には、該当する個所にレ印を付けてください。

年次 組 (男・女)

(2～4年次生回答)

マネジメントコース

環境コース

コミュニケーションコース

I 必修科目・選択必修科目について

1. 2～4年次生回答：あなたにとっての重要度とその理由を記入して下さい。

＜1年次必修科目＞	高い←	重要度	→低い	理由	
基礎演習	5	4	3	2	1 ()
文章表現法	5	4	3	2	1 ()
ネットワーク概論	5	4	3	2	1 ()
健康科学Ⅰ・Ⅱ	5	4	3	2	1 ()
簿記原理Ⅰ・Ⅱ	5	4	3	2	1 ()
経営学総論Ⅰ・Ⅱ	5	4	3	2	1 ()
異文化間コミュニケーション論Ⅰ・Ⅱ	5	4	3	2	1 ()
＜2年次必修科目＞					
国際経営論Ⅰ・Ⅱ	5	4	3	2	1 ()
会計学原理Ⅰ・Ⅱ	5	4	3	2	1 ()

2. 2～4年次生回答：あなたが選択した選択必修科目の重要度とその理由を記入して下さい。

＜1年次選択必修科目＞	高い←	重要度	→低い	理由	
速読法入門 (速読速記法入門)	5	4	3	2	1 ()
身体表現法	5	4	3	2	1 ()
知的空間入門	5	4	3	2	1 ()
史的背景入門	5	4	3	2	1 ()
地域空間入門Ⅰ・Ⅱ	5	4	3	2	1 ()

3. 必修科目の数について、どう思いますか。

多い

少ない

普通

わからない

II 演習科目について

1. 2～4年次生回答：あなたの受けた基礎演習で学べたことは何ですか。(複数回答可)

調査方法、レポートの仕方

関心・興味の対象の広がり

討論するおもしろさ

メンバーの考え方

大学生活(勉強・遊びなど)の過ごし方

特になし

その他 ()

2. 3・4年次生回答：演習Ⅱのゼミを選んだ、一番の理由は何ですか。
- | | | |
|----------------------------------|---------------------------------|--------------------------------------|
| <input type="checkbox"/> ゼミのテーマ | <input type="checkbox"/> ゼミの厳しさ | <input type="checkbox"/> ゼミのラクさ |
| <input type="checkbox"/> 先生の人柄 | <input type="checkbox"/> 就職が有利 | <input type="checkbox"/> 研究テーマ設定の自由さ |
| <input type="checkbox"/> 友達といっしょ | <input type="checkbox"/> しかたなく | <input type="checkbox"/> その他 () |

Ⅲ コース（マネジメント・環境・コミュニケーション）・進級制度について

1. 環境コースの2～4年次生回答：多くの学生が環境コースを選択しています。
あなたが環境コースを選んだ理由は何ですか。（複数回答可）
- | | |
|--|---|
| <input type="checkbox"/> 経営環境に関心がある | <input type="checkbox"/> 自分の好きな勉強ができる |
| <input type="checkbox"/> 融通が利く | <input type="checkbox"/> 海外実習に費用がかかる |
| <input type="checkbox"/> マネジメントコースに関心がない | <input type="checkbox"/> コミュニケーションコースに関心がない |
| <input type="checkbox"/> 環境コースがラク | <input type="checkbox"/> その他 () |
2. 3・4年次生回答：2年次から3年次への進級制度は、必要ですか。
- | | |
|------------------------------|-------------------------------|
| <input type="checkbox"/> 必要だ | <input type="checkbox"/> 必要ない |
|------------------------------|-------------------------------|
- 理由

Ⅳ 授業について

1. 1週間のうち、授業のために何日大学へ来ていますか。
- | | | | | | |
|-----------------------------|-----------------------------|-----------------------------|-----------------------------|-----------------------------|-----------------------------|
| <input type="checkbox"/> 1日 | <input type="checkbox"/> 2日 | <input type="checkbox"/> 3日 | <input type="checkbox"/> 4日 | <input type="checkbox"/> 5日 | <input type="checkbox"/> 6日 |
|-----------------------------|-----------------------------|-----------------------------|-----------------------------|-----------------------------|-----------------------------|
2. 授業を欠席する場合の主な理由は何ですか。（複数回答可）
- | | | |
|----------------------------------|------------------------------------|---|
| <input type="checkbox"/> 1限だから | <input type="checkbox"/> 5限だから | <input type="checkbox"/> 授業に興味をもてない |
| <input type="checkbox"/> 他の人も出ない | <input type="checkbox"/> 友達がとっていない | <input type="checkbox"/> 自分で勉強すれば十分 |
| <input type="checkbox"/> 出席をとらない | <input type="checkbox"/> 先生が嫌い | <input type="checkbox"/> テストの内容を知っている |
| <input type="checkbox"/> 天気によって | <input type="checkbox"/> 通学時間が長い | <input type="checkbox"/> 授業以上にやりたいことがある |
| <input type="checkbox"/> その他 () | | |
3. 今まで受けた講義の問題点や不満はどのようなことですか。（複数回答可）
- | | |
|---|---|
| <input type="checkbox"/> 予告なしの休講がある | <input type="checkbox"/> 先生が大幅に遅れることがある |
| <input type="checkbox"/> 指定した教科書を全く使わない | <input type="checkbox"/> 人数が多すぎる |
| <input type="checkbox"/> 板書の字が読みとれない | <input type="checkbox"/> 授業内容がわかりにくい |
| <input type="checkbox"/> 先生が学生の理解度に関心 | <input type="checkbox"/> 先生の声が聞こえない |
| <input type="checkbox"/> 授業内容に興味をもてない | <input type="checkbox"/> 私語が多い |
| <input type="checkbox"/> その他 () | |
4. あなたが「履修したい授業」は、どのような授業ですか。（複数回答可）
- | | |
|-------------------------------------|---------------------------------------|
| <input type="checkbox"/> 宿題・レポートが多い | <input type="checkbox"/> 宿題・レポートがない |
| <input type="checkbox"/> 出席をとる | <input type="checkbox"/> 出席をとらない |
| <input type="checkbox"/> 採点が厳しい | <input type="checkbox"/> 採点が甘い |
| <input type="checkbox"/> 定期試験がある | <input type="checkbox"/> 定期試験がない |
| <input type="checkbox"/> 内容がわかりやすい | <input type="checkbox"/> 授業の進め方が上手 |
| <input type="checkbox"/> 緊張感がある | <input type="checkbox"/> ディスカッションができる |
| <input type="checkbox"/> 問題意識をもてる | <input type="checkbox"/> 人数が少ない |
| <input type="checkbox"/> 学生の授業態度がいい | <input type="checkbox"/> 私語がない |
| <input type="checkbox"/> その他 () | |

5. 今までの授業の中で、「受けてよかった」「ためになった」授業の科目名・教員名・理由をあげて下さい。(複数回答可・別紙の教育課程表を参照)

6. 授業で改善すべき点は、どのようなことですか。具体的にあげて下さい。

V 学部の将来について

- もし在学中に半期(または1年間)、授業を履修しないでもいい期間ができるとすれば、あなたはどのように活かせますか。(複数回答可)
留学 海外旅行 専門学校に通う
自分で資格取得の勉強 アルバイト 社員としてを仕事する
企業実習(インターンシップ)に参加 語学力をつける
何もしない その他()
- 成績優良者の優遇措置について、どうすればいいと思いますか。
現行のまま(6単位追加して履修できる) 学費の減額
優遇措置は必要ない その他()
- 演習Ⅰ(2年次後期)の位置づけが変わるとすれば、どれを希望しますか。
必修(現行のまま) 選択必修 選択
- 演習Ⅱ(3年次)・演習Ⅲ(4年次)の位置づけが変わるとすれば、どれを希望しますか。
必修(現行のまま) 選択必修 選択
- 語学科目では、英語が必修、その他の第二外国語は選択必修となっていますが、今後の語学教育として、どれを希望しますか。
このまま 英語以外から必修を選ぶ すべての語学科目が選択

6. 今後の語学教育に望むことは何ですか。(複数回答可)
- 会話能力や実用性に力を入れる
 - 全体のレベルをあげる
 - ネイティブ・スピーカーの授業を増やす
 - 少人数制を徹底する
 - 一定レベルの語学力がある場合、単位を優遇する
 - プレイスメント・テストをやめて、希望するレベルの授業を履修できる
 - その他 ()
7. 資格取得や就職活動のために希望することは何ですか。(複数回答可)
- 資格取得の実力がつく授業
 - 平塚キャンパスにおける公務員講座の開講
 - 留学希望者へのサポート強化
 - 1年次から、企業家の実践的な話を含む授業の開講
 - その他 ()
8. 国際経営学科の「国際」は、学部教育に反映されていると思いますか。
- 反映されている 反映されていない
- 理由：
9. 今の経営学部・国際経営学科の教育に満足していますか。
- 満足 不満 どちらでもない
10. 今の経営学部・国際経営学科は、あなたの将来を支える力になりますか。
- なる ならない
- VI. アンケートに表しきれなかった経営学部教育の改善すべき点や、アイデアなどを
ご自由にお書きください。**

ご協力ありがとうございました。アンケートの集計結果は、みなさんに報告します。